

「主が新しい事を」

イザヤ書 43章 18節～21節

説教 本庄侑子牧師

「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る。」(イザヤ書43章19節)2019年の標語です。この言葉を聞いた人たちは疲れきっていました。最初は希望を持っていたのです。頑張っていれば未来は開ける、と。でも何十年経っても変わりませんでした。この先も同じとしか思えません。しかし、そこに主なる神が入ってこられました。神が行動を起こされました。

イザヤ書は全部で66章ですが、大きくは3つの時代に分けられ、後に一つの書物にまとめられたと言われています。43章はバビロン捕囚の時代です。捕囚といっても、自分の家を立て、家庭生活を営むことがゆるされた人も多かったようです。彼らが直面したのは物質的な問題ではなく、信仰の落ち込みでした。

神に祈っても何も事が動かない日々が何十年と続きました。さらに深刻なことには、捕囚の地でこれまでのことを振り返ると、見えてきたのは自分たちの罪でした。こうなったのは外交政策を誤った王のせいでもなければ、攻めて来た強い国のせいでもない。自分たちの罪のせいだったのだ。何十年と神の名を呼び続けた果てで直面させられたのは、自分たちの罪という深い絶望でした。

彼らは未来になんの期待も抱けなくなりしました。そんな資格などないことがよくよく分かってしまいました。そして今を見ると、生きる上で困ることはないのです。守られた環境の中で、ただ何となく同じことを繰り返していれば、それなりに生活は成立するのです。私たちにはこれで十分だ。そう思うのも当然です。

預言者もそうでした。預言者だからといって特別な人物だったわけではありません。召された時も嘆きました。自分には語る言葉も、民を導くための方策もない、と。彼も同じでした。民と諦めを共にして打ち倒れていました。

しかし、その彼に神の言葉が臨んだのです。預言者の心にみるみると命が目覚め始めました。自分を立ち上がらせた神の言葉を携えて、人々のところに赴き、肩を揺さぶるようにして語らずにはいられなくなりしました。そうして語られたのが今日の御言葉です。

彼らが聞いたのは、現状を変えるために自分たちが何をすべきか、という言葉ではありません

んでした。主が何を起こしておられるか、でした。まだ具体的には何の兆しも見えませんでした。しかし、主は見ておられました。荒れ野に道が設けられ、砂漠に水が溢れる様を。そこで水を飲んだ者たちが、それを成してくださった神を宣べ伝えずにはいられなくなった姿を。

神は、遠い人ごとのようにしか神を語れなかった彼らに、新しい出エジプトを企てられました。彼ら自身が、主なる神を自分のこととして語る言葉を持つために事を起こし、現実介入していられました。彼らの手で終わらせてしまった歴史を、彼ら自身が神を経験するための始まりに変えてしまわれました。

この後、彼らは故郷エルサレムに帰ることがゆるされました。新しい出エジプトが起こったのです。彼らに力や可能性があったからではありません。彼らが十分に反省したからでもありません。主が彼らを愛しておられたからです。

彼らはエルサレムに帰りました。しかし、ただ過去に帰ったのではありませんでした。全く新しい未来が与えられたのです。そしてそれは、始まりにすぎませんでした。彼らが喜び事を超えて、その喜びの声を聞くのを待っていた人たちがいたのです。バビロン捕囚という絶望的な時代、恥ずかしい歴史も、主はご自身の救済史の中に取り込んで、落ち込み、疲れ果てた民を、主の憐れみを証する証人にすっかり変えて、用いていられました。

大阪教会は、もうすぐ献堂100周年、創立150周年を迎えようとしています。これから歴史を振り返る機会を重ねるでしょう。しかしそれは、ただ昔を懐かしむためではありません。そこで私たちも見ることになるのです。終わりを始まりに変えてきてくださった主の憐れみを。そして、主の憐れみを証する証人として、新しく立ち上がりずにはいられなくなるのです。

この後、今年初めての聖餐に預かります。あのイエス様が、私たちの罪にもかかわらず、終わりの日に至るまで、全く新しい未来を開き続けてくださる。その目に見える印です。主にあって罪の裁きは完全に終わったのです。イエス様が言われます。「見よ、わたしは新しい事をなす。今や、それは芽生えている。」

(記 本庄侑子)